

2024年9月8日 スチュワードシップ月間②

説教題「祈る喜び」 マタイによる福音書 14 章 13 節、22～23 節

主任牧師 加藤 誠

**「群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた」
(マタイ福音書14章23節)**

スチュワードシップとは「神の恵みの良き管理人」としての「心得」ということ。神から与えられた恵みを自分の楽しみのためではなく神さまの栄光をあらわすために用いる「姿勢」のこと。具体的には、その生涯を神のスチュワードとして歩み通された主イエスを真似て、主イエスが大切にされたことを大切にすることです。今朝は主イエスが何よりも大切にされた「祈り」について聖書から聴いていきましょう。

主イエスを見ていて不思議に思うのは、「神の独り子」なら祈らなくても神と一心同体で歩めたはずなのに、なぜあれほど「祈り」を必要とされたのかということ。主イエスは宣教の働きの前に一人で祈り、重要な決断を前に祈り、またよく人々と共に祈られました。信仰薄く頼りない弟子たちのために祈りを尽くし、十字架の上では自分に唾を吐きかける者のために祈られました。

主イエスのこのような姿を通して、「祈り」は「神とのつながり」なのだと示されます。ヨハネ福音書 15 章「ぶどうの木のとえ」では、主イエスがまず私たちにつながっているから「あなたがたもわたしにつながっていなさい」と勧められています。主イエスが私たちとのつながりを切ることはない。私たちの足がどれほど汚れていても主イエスが手放すことはない。けれども、私たちの方が「この足は洗わなくてもよいです！」と足をひっこめたなら主イエスと私たちとの関係は切れてしまう。ぶどうの枝としてぶどうの実を結ぶことができなくなってしまいます。せっかく主イエスがつなげてくださった神さまの愛を生きることができなくなってしまいます。そういう意味で「祈り」は私たちが神（主イエス）とつながるための大切な「管」であり、信仰に不可欠なものなのです。「祈り」なしに信仰生活はない。スチュワードとして生きることが出来ない。第一に「祈り」があつて初めて他の奉仕も可能になることを覚えてほしいのです。

「祈り」には「二人または三人の祈り」「共同の祈り」（礼拝や集会での祈り）、そして「ひとりの祈り」があり、それぞれ性格が違います。「共同の祈り」は、集められた人々と神への信仰を共有し、その集まりが神への礼拝となることを願ってささげられるものです。また「二人または三人の祈り」は、信仰の友と個人的な祈りの課題を共有する祈り、心を開き合う祈りです。その友の信仰を分けてもらえる恵みがあります。人と人は考えや個性が違うので、ぶつかります。ぶつかって良いし、多様な方が良いのです。ただ多様でありつつ、神に向かって一緒に歩むためには「祈り」が必要です。「二人または三人で祈り」は恥ずかしいし、苦手だという人が多いかもし

れません。が、ぜひ教会の祈り会に出て、その恵みを味わっていただきたいのです。

そして三つ目に「ひとりの祈り」。信仰で一番大切な祈りです。他者との祈りでは、私たちは残念ながら人の目が気になり神の前に「丸裸」になることはできません。心の底からの本音が語れないことがどうしてもある。しかし私たちの心のうちをすべてご存知である神さまの前で正直に祈る。格好をつけたり、自分を装ってしまうことなく、本音で祈る。そのような一人の祈りの大切さを主イエスは教えておられます（マタイ6：6）。「戸を閉めて、一人きりになって祈れ」と。すべてをご存じの神さまの前で、自分の弱さ、心配、不安、疑問、すべてをぶつけて祈りなさい。そのとき聖霊の働き、聖霊の取り扱いを受けて、人知を超える神さまの平安が与えられることを教えてくださったのです（フィリピ4：5b～7参照）。そして、そのような「ひとりの祈り」を主イエスご自身が何よりも大切にされました。

今朝の箇所ですが、五千人の供食の直前と直後、人々からも弟子たちからも離れて「ひとりの祈り」の時間をとろうとされている主イエスの姿が浮かび上がってきます。主イエスは次々に押し寄せてくる人々に対して宣教の働きを止められません。どんなに疲れていても御自分を後回しにして、人々と過ごす時間を大切にされました。その主イエスがわずかな隙間を見つけて「ひとりの祈り」を確保しようとされるのです。この直前にバプテスマのヨハネの処刑が報告されています。絶対的権力を握るヘロデ王の前では「神の正しさ」も捻じ曲げられ「白が黒」と言われていく。酒席の余興で人の命が簡単に消されていく。不条理もはなはだしい、神の恵みも正義も一切感じることでできない現実、神不在の世界。その世界を生きる私たちに神の愛を伝え、神の愛につなげるために主イエスは来られました。その主イエスが格闘するように日々「祈る時間」を取り分けられた。先週も紹介したように荒れ野の悪魔の誘惑が繰り返し主イエスの心を攻撃していたのかもしれませんが、ところが「ひとりの祈り」の時間をとろうとしても群衆が押し寄せてくる。本音では人々の目から隠れたかったことでしょうが、主イエスは人々を見捨てることをなさらない。ここに私たちへの愛がにじみ出ています。そして群衆を解散させて、弟子たちを先に行かせてようやく一人になられた。そこで何を祈られたのか何も書かれていませんが、少なくとも弟子たちのための祈りが含まれていたことは、そのあとの主イエスの行動で分かります。弟子たちと離れている時も、弟子たちを覚えて祈り続けてくださる主イエス。この主イエスの執り成しの祈りによって、弟子たちは日々主イエスに従い、神への信仰をいただくことが出来たのです。そういう意味で「祈りなさい」と私たちが招かれているのは「私たちが神さまにつながる」だけでなく、どんな時も「私たちが神さまとつなげるために祈ってくださる主イエス」に気づかされるためでもあるのです。この主イエスの祈りにつなげられ、教会の共に祈りにつなげられて、共に主イエスに従っていきましょう。